

大阪府千里ニュータウンに残っていた 小っちゃい半自然草原の植生

○横川昌史（大阪市立自然史博物館）、長谷川匡弘（大阪市立自然史博物館）、平軍二（NPO 法人すいた市民環境会議）、尾方義雄（NPO 法人すいた市民環境会議）

大阪府の千里ニュータウンには、公有地であるが特に利用がされないまま 40 年以上草刈りが行われてきた小っちゃい半自然草原が残されている。これらの草原は、現在では用維持のために公的機関によって春と秋の年二回、草刈りと刈った草の持ち出しが行われている。このような都市部に残された草原にはどのような植物が残されているのだろうか？植物相と植生を調査し、その特徴を明らかにした。大阪府の千里ニュータウンに残された小っちゃい草原に 1m×1m の調査枠を設置し、枠内に出現した植物を記録した。クラスター分析や指標種分析などで、植生の類型化を行い特徴的な植物を洗い出した。

植物相調査の結果、ウツボグサ、ツリガネニンジン、ワレモコウ、スズサイコといった草原性と考えられる植物が多数確認できた。また、大阪府未確認だったヤマサギソウや過去の大阪府レッドリストで絶滅とされていたアイナエも確認できた。調査を行った場所は、都市部に残された小っちゃい草原であるが草原性植物の生育地として機能していることがわかった。2013 年から 2014 年の植生調査の結果、ネザサやススキが優占するタイプ、メドハギやウツボグサで特徴付けられるタイプ、アリノトウグサで特徴づけられメリケンカルカヤが優占するタイプ、チゴザサやノテンツキが優占するタイプの 4 つのタイプの植生が認められた。特に、アリノトウグサで特徴づけられる植生は表土が崩れた場所に、チゴザサやノテンツキが優占する植生は浸み出し水がある場所に限られており、狭い範囲に多様な環境が存在することで様々な植物が生育していることがわかった。2014 年以降に追加で行った調査も含めて、千里ニュータウンに残っていた小っちゃい半自然草原の植生について議論を行いたい。

半自然草原は肥料や飼料として草を利用することで維持されてきた生態系で、主に農畜産業との関わりが深いとされている。一方、今回の調査地は公的機関が用地維持・苦情防止などのために維持してきた草原であり、これらは維持されてきた社会背景が全く異なるという点で大変興味深い。しかしながら、今回の調査地のうち、草原性のものを含む多くの植物が確認されている場所は再開発のため売却されることが決まっている。都市部に残された草原なりの危機も踏まえた上で、その生態学的な面白さと保全上の課題を議論する必要がある。